古事記物語

高野正巳

古典文学全集〈1〉

古事記物語

高野正巳

高野正巳
古事記物語
ポプラ社　昭和47（1972）
238p　23cm（古典文学全集　1）
〔分類〕918

著者略歴

1905年，福島県に生まれ．東大国文学科を卒業後，奈良女高師教授を経て文筆生活に入る。現在，東京女子医大教授。文学博士。東大国語国文学会，日本児童文芸家協会の評議員。主な著書には「近世演劇の研究」「近松門左衛門集(全3巻)」「近松とその伝統芸能」「現代語訳近松門左衛門集」等，多数がある。

古典文学全集・1
古事記物語
（著者との話し合いにより検印廃止）
編著者・高野正巳（たかの まさみ）
発行・昭和40年6月30日　初版©
昭和47年12月30日　16版
発行者・久保田忠夫
発行所・株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町5　振替東京149271番
活版印刷・新興印刷製本株式会社
オフセット印刷・有限会社　トラヤ印刷所
口絵原色印刷・株式会社　双美堂
製本・石井製本工場

はしがき

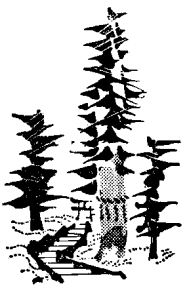
皆さん、古墳やはにわがつくられた時代の本を読んでみたいと思いませんか。それが、楽しい神話や、伝説の本だとしたら、なおさら興味があることでしょう。

日本でいちばん古い本は『古事記』です。『古事記』には、神話や伝説がたくさん書かれています。私たちの祖先は、とてもすばらしい神話をつくったのです。

でも、『古事記』は、たいへんむずかしい本です。そのままでは読むのにほねがおれます。そこで私は、『古事記』をやさしく、読みやすいように書きかえました。それがこの本、『古事記物語』です。

前半は神話で、高天原に住む神様の物語です。話は、イザナミノ女神が日本の国を生むところから始まります。スサノオや、オオクニヌシノ命の話などがあります。ウミサチ、ヤマサチの話も書きました。

後半は、神様の子孫の話です。その人たちが日本の国に住んで、世の中を治めるのです。その間に、いろいろのことが起こります。また、ヤマトタケルの話や、サホ姫の悲しい最期など、たくさんの伝



説をのせました。

古代の社会を研究するのに、『古事記』は最もよい資料です。私たちは、古代の人びとがつくった神話や伝説をとおして、彼らがどんなことを考えていたかを知ることができるのです。古典を読むということは、その時代の人の心にふれるということです。

この本を読んで、『古事記』についてもっと勉強したいという人がでれば幸いです。

では皆さん、楽しみにしてこの本をお読みください。

代々木にて

高野正巳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

《目　次》

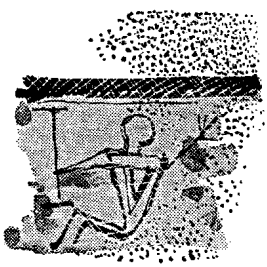
天と地のはじめ
イザナギ、イザナミの神……八
死の国……一三
天の岩屋……一九
オロチ退治……二六
稲羽の白ウサギ……三七
ヤガミ姫……四三
スセリ姫……四六
スクナビコナノ神……六三
きじのお使い……七〇
国ゆずり……七七
朝日のさす国……八五
コノハナノサクヤ姫……九一

ウミサチ、ヤマサチ……九六
トヨタマ姫の歌……一〇六

東への道

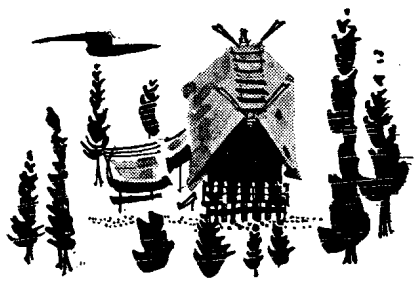
オモノヌシノ神……一一四
ヤタガラス……一二四
大和の国……一三一
ヘラ坂の少女……一三七
サホ姫の死……一四四
物いわぬ御子……一五二
ヤマトタケルノ命……一五八
白鳥……一七一
赤い玉……一七五
藤の花の着物……一八二
かまどの煙……一九〇

大きなさかずき……一九五
カルの兄妹……一九九
マヨワノ王子……二〇九
オオハツセ王……二一三
ふたりの少年の舞……二一八
歌垣……二二五
オキメノオミナ……二二九
解説……二三



装てい　新井五郎
さし絵　石井健之
カット　難波淳郎

天と地のはじめ



イザナギ、イザナミの神

さあ、できるだけ遠い昔を考えてください。

それよりもっと昔です。

天と地がやっと分かれたころのことです。天といっても雲がいっぱいで、何も見えません。地といっても、泥海をかきまわしたようにどろどろにごっていて、人間も動物も住んでいませんでした。

ところが、雲が重なりあって、いつもまっくらな天の上に、はげしい雨が降りつづきました。そして雨があがったとき、草の芽でも萠え出たように、ふたりの神様がお生まれになりました。

イザナギという男の神と、イザナミという女の神でした。イザナギノ神は手にりっぱなホコを持ち、イザナミノ神は首にみごとな鏡をさげていました。その鏡がきらきら光って、まっくらな世の中がいくらか明るくなりました。

ほのかな明かりにすかして見ると、雲と雲とのあいだに、美しい虹がかかっています。

「ああ、なんて美しい虹だ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あの虹の橋にのぼってみましょうよ。」

ふたりの神様は、手さぐりでそのきれいな橋の上までやってきました。虹の橋の上に立って下を見おろすと、形らしい形もない地上は、まるで一面の泥海です。ふたりは思わず顔を見合わせました。

「これじゃあ、人間が生まれても、とても住めやしない。」

「ええ、動物だって住めやしませんわ。」

「よし、それでは、あのふわふわした泥海の中に、しっかりした国をつくりかためてやろう。」

イザナギノ神は手にしたホコで、下のふわふわした泥の中をぐるぐるとかきまわしました。泥は水の中でかきまわされて大きくうずまき、水はうずの外のほうに輪をえがき、遠くへ遠くへと広がっていきました。

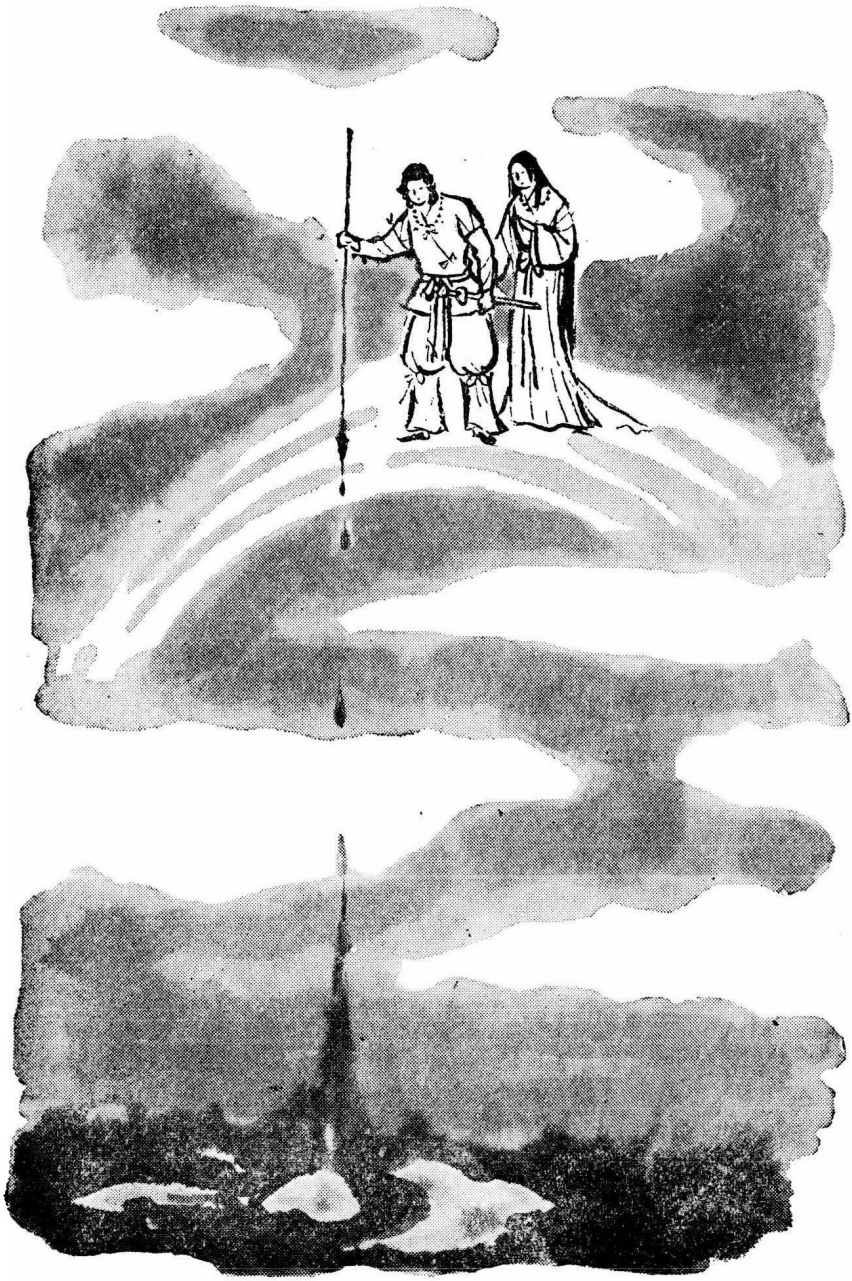
「よし、これでいい。」

イザナギノ神がホコを引き上げると、そのホコの先から、ぽたりぽたりとしずくがしたたり落ちました。それは、みるみるうちにかたまって、ひとつの小さな島ができました。とてもきれいな島でした。

海辺には青い松が立ちならび、白い砂浜に波が寄せては返すのが、はっきり見おろされました。

「なんて美しいんでしょう。」

イザナミノ神が、思わずさけびました。



「さあ、降りてみよう。」

ふたりの神様は、虹の橋から、その小さな島に降り立ちました。降りてみると、島は天の上から見たよりも、もっともっときれいでした。山もあれば川もあり、森もあれば野原もありました。

ふたりの神は、清らかな川の流れる野原の、森に近い場所を選んで、それはそれはりっぱな御殿を建てました。御殿ができあがると、まん中の太い柱の前で、イザナギノ神はイザナミノ神の手をとって、おもおもしくいいました。

「美しい女神よ、私たちはここで結婚しよう。そしてふたりで力を合わせて、りっぱな国をつくるんだよ。」

イザナミノ神は、しっかりとうなずきました。

「それでは私とおまえとで、この柱のまわりを両方からまわり、行きあったとき国が生まれるようにしよう。」

ふたりの神様は右左から、おごそかなようすでまわりはじめました。こうしてまず、淡路島が生まれました。

つぎに四国が生まれ、それから隠岐の島、九州、壱岐、対馬、佐渡の島とつぎつぎに生まれ、おしまいにいちばん大きな島、大倭豊秋津島が生まれました。この大倭豊秋津島が、今の本州のことです。

こうしてまず八つの島が生まれたので、日本のことを大八島の国といいました。

つぎにこのふたりの神様がお生みになったのは、大勢の神々でした。家の神、海の神、川の神、風の神、木の神、山の神、野の神などが、つぎつぎに生まれてきました。

ところが、最後に火の神をお生みになって、そのためにイザナミノ神は大やけどをなさいました。そしてとうとう亡くなってしまいました。

死んだ者がいく国を黄泉の国といいました。愛する妻が黄泉の国に旅立ったあと、イザナギノ神は悲しみのあまり声をあげて泣きさけびました。涙の流れるにまかせたので、そこから大きな湖が生まれました。

死の国

愛する妻を失ったイザナギノ神は、毎日さめざめと泣き暮らしていました。日がたっても、その悲しみはすこしもうすらぎません。それどころか、ますます悲しさは増していき、湖もいよいよ深くなっていきました。

「いまひと目でもよい。黄泉の国にいるというあの美しい妻に、どうかして会いたいものだ。」

とうとう、妻に会いたい気持ちをおさえきれずに、イザナギノ神は黄泉の国へと旅立っていきました。

黄泉の国は暗い地の底にありました。この世の者がいくことのゆるされないところです。黄泉の国の御殿は、冷たい石の扉が、がっしりとこの世とのあいだを閉ざしていました。

イザナギノ神は、やっとここまでたどりつくと、扉の内側に向かってやさしく呼びかけました。

「いとしい妻よ。私たちが力を合わせてつくった国は、まだ形ができたというだけで、ほんとうにできあがったわけではない。私には、おまえの助けが必要なんだ。こんな暗いところにいないで、ね、

お願いだ。私のところにもどっておくれ。」

それを聞いてイザナミノ神は、

「ああ、なぜもっと早くきてくださらなかったのかしら。もうおそすぎました。私は黄泉の国の食べ物をもう口にしてしまった人です。もうふたたび、あなたの国にもどることはできませんわ。でも、せっかく迎えにきてくださったんですから、なんとかして、この国の神々にお願いしてみましょう。どうかそのあいだ、私の姿をごらんにならないでくださいまし。」

といいのこして、御殿の奥のほうにいってしまいました。

イザナギノ神は扉のところにたたずんで、いわれたとおりにじっと待っていました。時間はどんどんすぎていくのに、イザナミノ神はなかなか姿をあらわしません。とうとう待ちきれず、イザナギノ神は石の扉を自分であけて、中にはいっていきました。

中はまっくらです。イザナギノ神は、頭の左側にさしていたくしをぬきとると、その片端を一本折りとって火をつけました。そして、その小さな光をたよりに、そろそろと御殿の中を進んでいきました。

やっと、イザナミノ神の姿が見つかりました。女神は床の上に横たわっていました。ところがどうしたことでしょう。あんなに美しかった女神の姿はすっかりくさって、からだじゅうにうじが、うようようとうごめいているではありませんか。おまけに、たくさんの小鬼のようなみにくい生き物が、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com